

# たより

## 『美紗の会』 ニユース

第33号

平成十一年十二月十三日

発行者  
「美紗の会」  
03-3441-2726  
編集責任者  
大久保 朋子

### 今年をふりかえって

今年も早や師走月となりました。世紀末の終りを告げるかのように多くが破壊され、常識がくつがえされ、まさに混沌とした年でございました。

そんな中で、わが美紗の会は、変わることなく皆様のお蔭で存続できる幸せをかみしめております。

神田・龍名館で開催した浴衣会では、皆様のめざましい上達ぶりを嬉しく思ったことが、つい昨日のことのように思い出されますが、時は早や、もう来年のおひきぞめのおけいこに精を出す毎日でございます。

年と共に私の舞台活動は変わってまいりましたが、今年もまさにそうでした。はじめは手ごける大作馬場あき子先生の「橋姫」の舞踊曲を新国立劇場で発表。四月は東京と大阪で浅葉克己氏主催の日本タイポグラフィ展に、北園克衛の詩を音でデザイン。五月は、ニユースの会で司会を務めて下さった田中優子先生と音響学会で、江戸の音のトークと演奏。九月は新国立劇場「天からさし込む光のしらべ」でパーカッションとサックスとの共演。身も細るような緊張感を感じられる邦楽の舞台と違って、

さまざまなジャンルの音の饗宴。特に指を天にかざして祈るように歌う喜納昌吉氏の声には舞台のソテでしびれつぱなしてました。

十月は、石川県小松市民ホールで「ポエトリーリーディングの夕べ」に参加。前衛詩人やミュージシャンに交じって江戸のモダンを唄いました。十一月は音羽の森に佇む鳩山会館で二回目のニユースの会。世紀末をめぐくるにふさわしい伝統は妄想なのか? という、

これからの伝統のゆくえをさぐる会となりました。私の内なる音楽も、さまざまな音が波のように打ちよせては又もとに戻ってゆくようです。

六歳で伝統の音と出逢い、共に離れることなく生きてまいりました。そして多くの出逢いがあり、迷い、苦しみ、喜びの中で音楽が共鳴し、変化して——そして気がつく、と、六歳で入門し、お師匠さんの前にちよんこんと座り、小さな口で懸命に唄っている私がいま。まさしくこの原点が私の中の伝統なのだと思えます。これから、表現したい音楽がどのように変わってゆくのか自分でも予測できません。

### 西松布 暁

んが、やはり三味線音楽は座敷から生まれた粋の世界。日頃美紗の会のお弟子さん方とさしむかいで唄う時が、いちばん心落ちつく幸せなひとときでございます。

以前、共演した喜納昌吉氏がつぶやいた言葉を思い出します。三味線は微妙で色っぽくって良いね。この世界にひたつたら深くてぬけ出せなくなりそうだな——と。

### 天からさし込む光のしらべ

——和洋混載の音楽オンパレードを聞く——

題名からはどんな内容か想像がつかなかったが一言で云えば、目と耳の両方で楽しむといううまい演出が素晴らしい。いけば花とテーブルアートで舞台が飾られ、目を楽しませながら邦楽洋楽舞踊色々取り混ぜて耳を楽しませようという試みは、この新しい劇場の広く高い舞台にふさわしく、きらびやかな印象を残して成功だったと思う。師匠の「秋の夜」は広く高い空間にもよく声が伸びて、いつもの様に安心して聞けた。三味線の音色は賑やかな歌よりもどちらかといえれば秋の寂しさの表現の方に優れている様で、ましてや習った唄で歌詞を覚えては、尚更寂しさを身近に感じられる。私の大学時代のドイツ語の

### 日本文化というぜいたく

田中 優子

「真にぜいたくな時間」というのはこういう時間なのだと思える時を、やっとなしつくり出すことができればいい。それは、山や空や緑といった自然とともに作る場合もあり、読書を通して著者と与えられる場合もある。そしてもうひとつは、出合いを二週間ほど前、東工大で音響学会が開かれた。講演依頼のとき、「三味線も弾いてもえませんか」とのお話。即座にお断りした。同時に素晴らしい音が浮かんできた。音響学会は音楽好きの人がすくぶる多くて皆さん耳が肥えている。だからこそ、「三味線や唄とのか」と思っていただけなのを、お聞きかされた。思ったのをお聞かせしたい、と思った。そしてその場で、地味、西松流の西松布唄(にしまつふい)さんと推薦された。布唄さんは私と同年代のなんと、豊かな女性で、長明、新内、富本、小唄、端唄とあらゆる分野をこなす。六歳から鍛え上げられたプロ中のプロだ。その演奏を聞くに、艶のある声と三味線の音に、たちまち異世界に引き込まれる。この七、八年はアメリカやヨーロッパで演奏活動を続け、現代詩を三味線に乗せ、みずから作詞作曲もしている。当日は、果たしてその布唄さんの艶が大学のホールに響きわたるし、私と彼女と対談しながら、人生でめつたに訪れない芳醇な時をすごして。ちかごろ、日本文化を担う人たちがすごい。能、狂言、尺八、雅楽、生け花、茶の湯、書、絵画、着物。伝統はすべて、むしろ一歩、外に向かっている。思っているのは大間違い。彼らは従来の技術に十分に身につけながら新しい世界を表現しはじめている。彼らの周囲にそれを求める、支え、引き出すという人々も出てきている。たとえば布唄さんの才能は、ジョン・ソルト博士

し、もうのはやむを得ない事なのだろうか。でも全体として全く違和感が無かったことからは、今更なるのかもしれないと思つた。聞く側観る側からすれば変化が多いので飽きる間もないが、それぞれの演奏のレベルが高ければこんな楽しい演奏会は日本でもしか聞くことが出来ず、文句のつけようがないのである。聞く側が曲に合わせてギヤを回しながら対応すれば良い訳で企画者の意図は十分に叶えられたと思う。

他の演奏についてそれぞれ論評は割愛するが、ソプラノ歌手寺島夕紗子さんの歌った「さとうきび畑」が特に印象に残った。私は元来ソプラノの歌は基本的にあまり好きでなく、本能的に初めに聞いたにも拘らず感動したは多分曲と歌詞が良かったことと、日本語の発音がきれいで歌詞が殆ど全

て聞き取れたことであつたと思つた。沖繩のさとうきび畑で戦いに消えた父親を偲ぶ反戦歌として聞いたが、哀調を帯びたメロディに乗ってさとうきびが風に鳴る情景が目につく。不意にも目が涙も曇った。年を取ると涙もろくなるのである。

此の歌を男性コーラスをバックにパルトンのソロで聞けたら素晴らしいだろう。舞台の最後はこれと沖繩バンドによる「沖繩から世界へ」音楽のメッセージが音響で広い空間を圧倒した。さすべての人の心に花を、さすべての武器を楽器に「など久し振りに沖繩の音を聞いたがいずれも感動感にあふれ、企画者が意図した縄文人達の優れかけようという試みはここで最も高く上ることが、成功裡に幕を閉じることになった。

——佐久間俊治 記——

